

分野	評価項目	達成状況	達成状況	学校の取り組み状況	改善方策
1 一人一人に応じた教育の充実	個別の指導計画の作成・活用において、特性や実態を把握して、指導目標を設定し、情報保障や聴覚活用、音環境への配慮等の適切な指導や必要な支援方法や指導体制の工夫改善を行っていますか？	A	3.5	○聴覚の子どもに対する音の聴かせ方について、教職員の意識を高めると同時に子ども自身にも意識させることが大切だと感じた。 ●聴覚の自立活動の「4つの柱」が、あまり周知されていないように感じた。 ○合同自立活動の研究を通じて、生徒の実態に寄り添える学習内容や学習目標を検討することで、より生徒の立場に立った授業展開を考えることができた。	○「音の聴かせ方」について、全職員で意識できるように、職員朝礼などを利用して周知していく。 ○「聞こえ」について、聴能部とも、より確認、連携を図る。 ○聴覚だけでなく、自立活動について考えるチームや部署を作ってはどうか。 ○専門性の継承とともに、教職員一人一人の意識を高める。 ○色々な教職員が聴覚部門、知的部門の担任を経験し、双方の教育課程や自立活動について学ぶ機会を持つ。
	個別の指導計画の評価において、客観的な達成基準を用いて分かりやすい評価を行い、指導方法や指導体制の工夫改善を行っていますか？	B	3.2		
	障害の特性や、実態把握から教育課題を明確にした自立活動を行っていますか？	B	3.3		
	個別的教育支援計画の作成・活用において、幼児児童生徒及び保護者と合意形成を図り、合理的配慮を提供していますか？	B	3.4		
2 社会に開かれた教育課程の編成	学校教育目標等や教育課程が教職員間で共通理解され、学校教育目標の達成に向けて発達段階や習熟度に応じた教育課程に工夫改善していますか？	B	3.3	○聴覚グループの合同自立活動での手話教室は、地域の成人聴覚障害者を講師として手話を学ぶ良い機会である。講師謝金をPTAより出していたが、財源が確保できていなかったが、できれば体験活動や、地域人材確保のための予算がとれると良い。 ●ホームページをうまく活用できていない。リニューアルも検討すべき。 ●情報の担当は、誰にでもできるものではないので難しい面がある。	○交流・体験チャレンジ事業の予算を充てられないか？また、交流や自然体験時の業者へのバス依頼を、スクールバスを運行することで予算をまかなえないか検討する。 ○年度内にCMS導入予定。 ○高等部のある学校のように、情報の教員が担当できるようにしてはどうか。
	地域資源(施設・人材等)を活用した体験教育や研修を推進していますか？	B	3.1		
	授業見学DAYや公開行事、各種通信、学校HP等の多様な機会により、教育活動の情報提供を行っていますか？	B	3.4		
3 キャリア教育の充実	キャリア発達段階表(基礎的汎用的能力)の視点を取り入れて、年間計画や単元計画、学習内容を工夫改善していますか？	B	3.1		
	体験教育による協働や振り返りを通して、自己有用感や自尊感情を培うなど、内面の成長に働きかけていますか？	B	3.2		
	生活する、働く意欲・態度・能力を培う学習計画や学習内容となるよう工夫改善していますか？	B	3.2		
4 主体的・対話的な深い学びによる授業改善	興味関心を引き出し、見通しを持たせることで、思考・判断・表現できる授業の工夫・改善を行っていますか？	A	3.6		
	手話等の多様なコミュニケーションによる対話や協働的な学び、振り返りによる授業の工夫改善を行っていますか？	A	3.5		
	「わかる」「できた」「楽しい」を通して、意欲や達成感、自己肯定感を高める授業の工夫改善を行っていますか？	A	3.5		
5 特別支援教育及び聴覚障害教育の専門性の向上	研究テーマに沿って、学部の研究やグループ別研究を推進し、実践報告会や実践報告集等で、共通と還元を図っていますか？	A	3.5	○他グループの参観が良かった。気軽に見学に行くことができた。 ○公開講座では、普段依頼できない講師を招待し研修できた。 ○自閉症ケースの事例検討会では、各学部の自閉症児について教師間で情報共有ができた。	○来年度も継続して、研究を推進していく。他グループの参観も続ける方向で検討していく。 ○成果があった取組みは、今後も工夫・改善しながら続ける。 ○公開講座は、来年度も様々な研修会を通して、聴覚障害の研修を継続していきたい。聴覚障害児のきこえや、補聴器、発音発語、自立活動などの研修について検討していく。 ○職員のニーズを聞きながら、様々な研修会を企画していく。
	聴覚障害教育の研修に努め、専門性の向上を図り、幼児児童生徒の指導や支援の実践に活かしていますか？	B	3.4		
	幅広く特別支援教育の研修に努め、専門性の向上を図り、幼児児童生徒の指導や支援の実践に活かしていますか？	A	3.5		
6 交流及び共同学習の充実	八条認定こども園や中筋小学校、豊岡高等学校(全・定)、豊岡総合高等学校、近畿大学附属中・高等学校等学校間の交流及び共同学習を通して、人間関係づくりや相互の理解を深めていますか？	B	3.5	●居住地校交流では年3回の出張をしているが、2回は打合せで、交流場面は1回しか付き添えない。 ●予算との兼ね合いがある。 ○居住地校交流で出会った子どもが通級で来校しており、会うのを楽しみにしていた。 ●地域の交流や学校公開の機会を思い切って減らす、交流学校や学年を限定するなど、学校として大胆な改革がないと、業務改善や適正化は図れない。子どもたちも日常を安定して送れないのではないかと考える。	○打合せ以外で、交流場面に担任が参加できると内容の充実が図られると考える。 ○一律に回数を決めるのではなく、必要に応じて付き添いを増やすなど(進路にかかわる場合など)臨機応変に対応していく。 ○行事の精選を思い切って行う。 ○校務分掌の業務内容も本当に必要かどうか考えていく。
	居住地校との交流及び共同学習を通して、人間関係づくりや相互の理解を深めていますか？	B	3.3		
	「ニコニコまつり」や「手話交流会」等を通して、地域との交流の充実を図り、障害の理解啓発を推進していますか？	A	3.5		
7 センターの機能の発揮	巡回相談や教育相談等により、地域の学校園への地域支援の充実を図っていますか？	B	3.4	●難聴児担当者連絡会の後、その研修内容の成果をフィードバックしてもらう方法はないか。 ●但馬のネットワーク会議において、他の特別支援学校に通級指導について理解してもらうことが難しいと感じた。	○アンケート等を利用して相手校の負担にならない方法を検討する。 ○目的がはっきりしていれば、成果(評価)もわかりやすい。やりたいことではなく、まずニーズや目的をはっきりと位置づけて開催するとよい。 ○アンケートにて回答してもらう。○通級指導の実施要項を渡して説明しており、継続していく。 ○見てわかるように、明文化、図式化の工夫をする。
	通級指導教室「あおぞらルーム」での指導や支援の充実を図っていますか？	B	3.2		
8 「チーム豊聴」としての教職員の協働体制	幼稚部・小学部・中学部・寄宿舎・事務室間の情報共有や連携を図り、教育目標の達成や教育課題の解決に取り組んでいますか？	B	3.2	●学部内にとどまっている。雑談・相談の中で共有できたらよいと思うが、... 時間的余裕がない。 ○小規模校は、役割が重複して見えにくくなる傾向があるため、組織やシステムの見える化に努めたい。 ●2つの委員会が1つになった場合の業務の改善まで、図られていないように思われ、一人の教員に負担過重になっているような気がする。	○教育相談・通級にかかる流れを図式化して周知する。 ○業務内容の見直しをしていく。
	各校務部及び各種委員会等の業務やその構成する教職員一人一人の役割を明確にして、教育目標の達成や教育課題の解決に取り組んでいますか？	B	3.0		
9 風通しのよい職場作り	業務改善及び勤務時間の適正化を図り、幼児児童生徒に向き合える環境を整えていますか？	B	2.7	●係や担当に仕事の負担がかかりすぎているものがある。	○遠方で雪の時期である、みんなのアート展は担当に負担がかかっている。但馬の特支4校で不参加にする方向にしてはどうか。
	お互いに共通理解したり、相談したりしながら、助け合う等の同僚生を高めていますか？	B	3.4		
10 家庭・地域・関係機関との連携・協働体制	家庭と個別懇談や連絡帳、学級通信等での連絡、相談、情報交換等を綿密に行っていますか？	A	3.7	○夏休みを利用して関係機関へ訪問したり、情報共有したりしている。成果としては、まだ連携とまではいっていない。	今後もつながりを作り、連携していくようにする必要がある。(実態や必要に応じて)個別支援計画も少し改善が必要と考える。
	個別的教育支援計画をはじめ、地域や関係機関との連絡を強化して指導や支援の充実を図っていますか？	B	3.3		

1 達成状況の評価基準は、A:よくできている B:ややできている C:ややできていない D:できていない E:わからない・判断できない
 2 達成状況の()内の平均値はAを4点、Bを3点、Cを2点、Dを1点で計算(Eは換算しない)
 3 達成状況のAは平均4.0~3.5、Bは平均3.4~2.5、Cは平均2.4~1.5、Dは平均1.4以下

学校関係者評価	学校評議員からの学校関係者評価にかかる指導助言
	<ul style="list-style-type: none"> 学校の行事を地域に広く開放することはよいことで教育効果もある。一方、多すぎると教室での学習効果が下がることもあるので、文化の伝統と子どもたちへの教育効果の線引きをバランスよくしたい。 「わかる」「できた」「たのしい」は、自己肯定感や自己有用感につながる大切なこと。特に年齢の小さいうちから自己肯定感が持てると、今後の学習の基礎となる。 障害のある人が学校から社会に出ると、一気に「学ぶ」機会がなくなる。18歳を過ぎてからも、「学ぶ」機会があれば成長できるケースもある。限られた時間の中で、「学ぶ」機会をたくさん与えてほしい。 自分の障害が説明できる力を育てることが大切。小さいうちに学校や寄宿舎で力を伸ばし、障害認識力が育ち、自分で説明できるようになってから地域の学校に通うようにすれば、子どもの数が増える一助となる。 「自分自身の障害を知る」「気づく」「振り返る」自分を知ることが、障害をプラスに変えるためのもの。人生の先を見据えた指導が必要。 業務改善については、少しの時間、できることから始める。いくつかの行事を隔年にするなど、ゆとりのある中で、教育活動を進められればよい。